九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 内なる自然の現れ : ゲーテの『若きヴェルターの悩み』について

木田, 綾子
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/21879

出版情報：九州ドイツ文学. 22, pp.23-41, 2008-11-29. 九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

# 内なる自然の現れ

## ── ゲーテの『若きヴェルターの悩み』について ──

木　田　綾　子

### 序

ゲーテの『若きヴェルターの悩み』（以下、『ヴェルター』と略す）には、主人公ヴェルターの手紙を整理した編者による前文が付されており、そこでヴェルターの悲惨な運命が予告されている。しかし、その前文に続くヴェルターの最初の手紙には、新しい土地での開放的な気分や、周囲の美しい自然について綴られており、前文とこの手紙は、あまりにも対照的と言えよう。何故、ヴェルターは死を選択しなければならなかったのか。以下、書簡体小説[1]という形で展開されて行く中で強く押し出されることになるのは、ヴェルターの内面である。主人公の内面を扱うことだけを考慮すれば、ゲーテと同時代の作家であるカール・フィリップ・モーリッツ（1756-93）の自伝小説で、「心理小説」と副題が付された『アントン・ライザー』（1785-90未完）のように、三人称の小説の形式でも内面を扱うことは不可能ではない。『ヴェルター』が書簡体小説である必然性はどこにあるのだろうか。

ゲーテは主人公を、絵を描き、文学を読む青年として設定した。つまり、絵を描く際に観察する自然の体験や、折に触れて読んだり話題にしたりする読書の体験に、ヴェルターの内面が現れるようにしたのである。同時に、この内面描写が他者との関係においても現れてくるように配慮されていることも間違いない。すなわち、ヴェルターを取り巻く人間関係や出来事などに対する判断、周囲の風景に対する受けとめ方に、彼の内面が表出しているのである。これにより、読者は彼の心のありようとその変化を窺うことができる。そのような内面表出にこそ、書簡体小説であることの必然性があるのではないか。

人間の内面や本性を意味する単語として、ヴェルターは Natur という語を用いる。彼の用いるこの語には、通常、二つの意味連関があろう。すなわち、人間の有する本性や性質を意味する場合と、風景や天候、動植物など、外の世界とそこにある一切のものを意味する場合とである。本論では前者を「内なる自然」die innere Natur、後者を「外なる自然」die äußere Natur と呼ぶ。ヴェルターは、これらを区別せずに用いているが[2]、区別すべきところを区別せずに捉えている点に、ヴェルターの内面の特殊性がある。

ヴェルターの内面、すなわち、内なる自然が現れるパターンは、次の二つに分けることができよう。一つ目は、内なる自然が外なる自然の描写に現れる場合であり、これが物語の基盤となる。そして、この意味での「外なる自然」のパターンと関連性が類似しているものとして、読書体験があろう。二つ目は、ヴェルターと他の登場人物との関係、すなわ

ち、他者世界との関りにおいて内なる自然が現れる場合に他ならない。この場合、ヴェルターによってポジティブに評価される人物は、そうした他者になり、同類の人物と見なされるが、それに対して、同類と見なされない他者には、彼の内なる自然が大いに反発するのである。

本論は、以下、ヴェルターの内なる自然の現れ方を考察の中心にすえながら、これと、自殺に至る結末との関連について読み解くことを目指す。

## 1．外なる自然における内なる自然の現れ

### (1) 賛美される自然

第一部５月10日付の手紙の冒頭で、ヴェルターは以下のように記している。

> すばらしい陽気さが、僕の魂をすっかり占領してしまった。僕の心全体で味わう甘美な春の朝のように。僕は一人だ。そして、僕のような魂のために作られているこの土地で、人生を楽しんでいる。ねぇ、君、幸福すぎて穏やかな存在の感情にすっかり浸っているから、僕の絵は難儀しているよ。今では、絵は描けそうにない。一本の線もね。だが、この瞬間ほど、僕が偉大な画家であったことはないんだ。(15)

ヴェルターの心が目にする風景に反応し、彼の内にあるものと外にあるものとが照応するとき、ひとつの逆転現象が生ずる。すなわち、ヴェルターの内なる自然が明るく陽気であれば、外なる自然も同様に明るく描かれるのである。つまり、外なる自然は、ヴェルターの内なる自然の現れに他ならない。

外なる自然を「楽園のような」(13) と形容し、それが明るく美しい風景としてヴェルターの目に映るとき、彼は自分の絵が難儀していることを感じながらも、そこに身を置いたときの自分を「偉大な画家」と称す。ヴェルターは、「僕らを自分の姿に似せてお作りになった全能の神」(15) が現前するのを感じ、表現することに憧れを抱く。

> そうすると、しばしば憧れは募り、こう思うのだ。ああ、お前の中にある、こんなにも豊かに、こんなにも温かく生きているものを、〔絵に〕再現することができたら、それを吹き込むことができたらと。するとその絵は、お前の魂の鏡となるだろう、お前の魂が無限の神の鏡であるように。――友よ、だが、そのために僕は破滅する。この数々の立ち現れの壮麗さの力に圧倒されるのだ。(15；括弧内は論者による補足説明)

ヴェルターが絵に再現したいと望んでいるのは、外なる自然を前にして、そこに現れている魂である。彼が圧倒されている「数々の立ち現れ」とは、内なる自然の現れと見立てられた外なる自然の動きに他ならない。自分の内にあるものを直接知覚するのではなく、外なる自然を経由して確認する彼の特殊な認識がここにあろう。このとき、なぜヴェル

ターは破滅を予感するのか。本論は、神、自然、ヴェルターの魂（これは、内面、心、内なる自然とほぼ同義と考えてよい）、絵の関係が、ヴェルターにおいて四位一体となっている点に着目したい。

自然の中に神の現前を感じたとき、ヴェルターが絵にしたいと望んでいるのは、外なる自然を経由して知覚する、神の鏡[3]としての自らの魂であり、内なる自然に他ならない。内なる自然の鏡としての絵は、神の鏡としての魂と同じ関係にあり、神、自然、魂、絵（芸術）という四位一体の連関が成り立つ。これが、ヴェルターの望む芸術の理想的なありようである。そして、それを可能にするのが、「楽園」に存在する「偉大な画家」であろう。しかし、この理想を追求すれば困難が付きまとうことは、容易に予測できる。人間が存在するのは楽園ではなく地上であり、地上の諸々の制約から免れることは不可能だからだ。従って、この連関を追求することが、破滅へと至るヴェルターの運命と密接に関連してゆく。

ヴェルターがロッテと出会い、ヴェルターの内面がロッテに対する情熱で一杯になると、周囲の風景は、更に「楽園」のイメージへと近づく。「僕がヴァールハイムを散歩の目的地に選んだときは、ここがこれほど天に近いところにあるとは思ってもみなかったよ」（57）とヴェルターが述べるとき、ロッテの存在がヴェルターの内なる自然に作用し、ヴェルターが自らの内面で生きているものを外なる自然を通して知覚したことになる。しかし、賛美される周囲の自然は、やがて自然のもう一つの側面である破壊的な姿をとってヴェルターの前に立ち現れる。

### （2）　破壊力を有する自然

ヴェルターの目に映る外なる自然が変化するのは、8月18日付の手紙からである。明るく美しかった周囲の風景は、もはや彼を幸福にすることができない。

> 生命ある自然に対する僕の心の溢れるばかりの温かい感情は、かつて僕を多くの喜びで一杯にし、周りの世界を楽園になしたのだが、今では耐えがたい拷問者、どこまでも僕に付きまとう悪霊となっている。（105）

このようにヴェルターの知覚の仕方が変化したのは、ロッテの婚約者であるアルベルトが旅先から帰ったことによる。ロッテの存在がヴェルターの内面に対してポジティブに作用したのとは反対に、アルベルトの存在は、ヴェルターの内面に対してネガティブに作用する。ヴェルターの目にする外なる自然は、明るく美しい風景として彼の目に映ったときと変わらないはずだが、ヴェルターの内なる自然の変化とともに、「移ろう」（107）ものとして彼の目に映る。

> 僕の心を蝕むのは、自然の万物の中に隠れ潜んでいる、食い尽くす力だ。それは、隣にあるものや自らを破壊し尽くさないものを形作ったことはなかった。そうして、僕

> は怯えよろめくんだ。僕の周りにあるのは、天と地と、それらが織り成す諸々の力！目にするのはただ、永遠に呑み込み、永遠に反芻する怪物のみだ。（109）

ヴェルターが自然の中に見ている「食い尽くす力」とは、ヴェルターの内に存在する破壊する力、破滅へと彼を導く力に他ならない。

ゲーテは、『ヴェルター』初稿の二年前、1772年に書いた書評『ズルツァーの美術』の中で、美学者ズルツァーが自然のもたらす快適な印象にばかり目を向けている点を批判した。ゲーテは自然には美と醜、善と悪が併存していると主張した後、次のように言及する。「芸術（Kunst〔技芸、技術、人工〕）とは、まさに対抗する力である。芸術は、全体が持っている破壊する力に対して自己を保持しようとする個的人間の努力に発している」。[4)]

破壊的な自然は、内なる自然の現れと見立てられた外なる自然の動きである。この破壊力に対抗し得る芸術は、個的人間の努力を通して自然と調和し一体となることが可能であると言えよう。破壊的な自然にも神の現前があるなら、ヴェルターが絵画を通して追求しようとした芸術の理想、神、自然、魂、芸術、この四位一体の連関がここでも成り立つ。現実において、これを追求するのは困難であるが故に、苦難を強いられるのは必至だ。しかし、破壊力に対抗し得る芸術に向けられたエネルギーは、ロッテとの出会いを通して他者へ向けられる。ヴェルターは、他者との関係においても四位一体の連関を求めるのだ。外なる自然を通して自らの内なる自然を知覚するヴェルターは、他者を通して自らの内面を知覚する。彼が追求しようとしたのは、他者の魂と自らの魂の触れ合いである。これを求めるヴェルターは、やがて破壊力を有する自然に呑み込まれてしまう。

自然の激しい破壊力をヴェルターが目の当たりにするのは、「編者より読者へ」[5)] に挿入された、ヴェルターが死を決意する直前の12月12日付の手紙だ。

> それから月が再び現れ、黒い雲の上で安らい、眼前で水が凄まじくも壮麗な光を反射しながら鳴り轟いたとき、僕は戦慄と同時に再び憧憬に襲われたんだ。ああ、両腕を広げて深淵に向かって立ち、呼吸をしたよ。深く、深くね。そして、恍惚となって我を失った。僕の痛みや苦しみを、あの深みへ沈めようと！ 波が轟々と押し流すように彼方へと！（213）

「凄まじい」と「壮麗だ」、「戦慄」と「憧憬」の相反する語の使用から分かることは、ヴェルターが外なる自然の中に明と暗の両方を同時に感じていることであろう。これは何を意味するのか。憧憬（Sehnen）の動詞である憧れる（sehnen）という語は、明るく美しい自然を前にしていたときにも使用された。[6)] ヴェルターは破壊的な自然を前にしても、神の現前を感じているのだ。かつて憧れたのは理想の芸術だった。他方、ここで抱いているのは、痛みや苦しみを押し流してくれるであろう彼方への憧れである。ヴェルターの求める理想の芸術は地上で適うことはなく、痛みや苦しみのない彼方とは、地上ではない場所を意味するであろう。「両腕を広げて」というのは、あたかも自然と一体になるために、自然

に呑み込まれようとしているかのような姿勢だ。「深淵に向かって立つ」とは、地上と彼方とのぎりぎりの境界線上にいることなのだ。[7]「人間の本性（Natur）には、限界がある」（99）と主張するヴェルターは[8]、ここでまさに自らの本性、つまり内なる自然が限界に達する寸前であるのを知覚しているのだ。

## Exkurs．読書体験における内なる自然の現れ

ヴェルターとロッテが読書に関して近い感覚を持つことは、第一部から度々示唆されてきた。二人の出会いにも読書体験が深く関っている。

> 自分の世界を再び見出すような世界、私の周りと同じようなことが起こる世界を描き、家庭の生活のように興味が持てて親しみを感じる、そういう話を書く作家が一番好きです。もちろん、家庭の生活は楽園というわけではありませんが、それでも、大体において幸福の源ですから。（45）

ロッテの読書に関する意見からは、ロッテが身近な世界を大切にし、その世界を楽園に近いものと感じていることが窺える。この意見に感動したヴェルターは、ロッテの生き生きとした唇や健康的な若々しい頬に「魂全体が惹きつけられて」（47）しまう。その結果、辺りが暮れてゆく中で、ヴェルターは音楽も耳に入らないほどの夢見心地になる。

舞踏会の最中に降り出した雷雨が過ぎた頃、同じ読書体験を有していたことにより、二人は心を通わせる。

> 雷鳴は遠のき、壮麗な雨が大地に降り注いでいた。爽やかな良い香りが暖かな空気に満ち、僕らの方へ立ち上ってきた。ロッテは窓辺に肘をついて立っており、視線は風景に遠く向けられていた。彼女は空を見上げ、僕を見た。目に涙がいっぱいに溜っていた。手を僕の手の上に乗せてこう言ったのだ。クロップシュトック、と。（53）

壮麗な外なる自然を前にして、ヴェルターとロッテの心は響き合っていた。それを確認するように、ロッテは「クロップシュトック」と一言だけ発す。二人はクロップシュトックの頌歌を思い、同じ世界を共有する。

読書を通してロッテと心が通い合うヴェルターは、やがて彼女の夫がアルベルトであることに、納得できなくなる。第二部の半ば、宮廷を辞し、次の勤務地だった公爵の許も去り、再びロッテの近くへ帰ろうとする頃、７月29日付の手紙の中で、ヴェルターはアルベルトを非難する。

> ロッテはアルベルトといるよりも、僕と一緒にいたほうが幸福になっただろう。ああ、彼はこの心の願いを全て満たすような人間じゃないんだ。感受性に何らかの欠如があ

> る。欠如 ── これは君のいいように受け取ってくれ。彼の心は、共感するようには響かない。ああ、僕の心とロッテの心がまさに一つに出会うような、そんな素晴らしい本の箇所でも響かないんだ。第三者の行動について、僕たちの感情が露わになるようないくつもの事柄においてもそうだ。ヴィルヘルム、確かに彼は魂全体でロッテを愛している。それほどの愛なら、何だって受ける資格はあるのだが。(157f.)

「心が一つに出会う」とは、ロッテが「クロップシュトック」と発した際や、オシアン朗読の際に二人が共有する感情に通じる。これは、ヴェルターの内なる自然が読書を通してロッテと一つになった、もしくは二人の魂が触れ合ったと言い換えることもできよう。少なくとも彼はそう感じ、それを愛と捉える。ところが、アルベルトには同様の感覚がない。それにも拘らず、ロッテのパートナーがアルベルトであることに、ヴェルターは合点がいかないのである。ヴェルターがロッテに恋したのは、初対面の好印象だけによるのではない。ヴェルターの内なる自然と共鳴するからこそ、彼の溢れる感性がロッテに向けられたのである。

ヴェルターの読書体験は、彼の内面と関連する。ヴェルターが壮麗な自然に身を置いたときに喜びを感じていた頃の愛読書は、ホメロスの『オデュッセイア』だった。智謀に長けたオデュッセウスが、自然神によってもたらされる数々の苦難を力強く乗り越え、生き抜く物語に、ヴェルターは生に向かう自分の姿を重ねて見ている。そして、ホメロスはヴェルターの熱情を抑える効果も併せ持つ。貴族の館で起きた不愉快な事件の後も、ヴェルターはホメロスを読み、心が穏やかになる。ホメロスが読書の対象である場合、彼はこの対象に呑まれることなく、彼の内なる自然は生に向かう。

しかし、ロッテへの思慕が募り、情熱に苦悩する第二部では、『オシアン』が愛読書になる。『オシアン』は、アイルランドの荒涼とした雄大な自然を背景に、勇士たちの滅びゆく様を歌う。最後まで戦い、力強く生き抜くオデュッセウスに対し、『オシアン』では、英雄は皆、死の運命を背負う。オシアンが初めて言及されるのは、ロッテと出会ってひと月もしない、7月10日付の手紙の中である。

> 仲間といて、ロッテのことが話題になったとき、僕がどんなばかげた様子をするか、君に見てもらいたいよ。「彼女のこと気に入った？」なんて聞かれるとね。気に入る！ ── この言葉は死ぬほど嫌いだ。ロッテのことが気に入って、あらゆる感覚、感情が彼女で満たされない人間なんているのだろうか。気に入る！　最近、「オシアンは気に入った？」って聞いた人がいたっけ。(75)

この頃ヴェルターが愛読していたのは、ホメロスの『オデュッセイア』であった。しかし、この記述から、既に『オシアン』を読んでいたことが示されており、『オシアン』を知りながら、愛読書はホメロスであることが示唆されている。このときはまだ、ヴェルターにとって『オシアン』は重要ではない。次に『オシアン』を話題にする、第二部の後半、10

月12日付の手紙の中では、「オシアンが、僕の心の中でホメロスを押しのけてしまった」（171）と記される。ヴェルターの心の中にはもはや「押しのけ」られたホメロスの入る余地はない。ロッテと知り合って間もない頃の記述と大きく変化している。これは、ヴェルター自身の内面の変化に因るものだ。彼が読み、味わうのは、ホメロスの『オデュッセイア』や『オシアン』という作品そのものではない。「僕は、昔の詩人を読む。すると、僕自身の心の中を見ているような気になるんだ」（185）。ヴェルターが書物の中に見ているのは、彼自身の心、すなわち、内なる自然に他ならない。

## ２．登場人物における内なる自然の現れ

### （1）　自然対社会

18世紀後半、身分制度は厳格に保たれていた。ヴェルターは、「身分の違いが必要」（131）であることを認め、貴族の存在や身分制を否定しているわけではない。もっとも、彼の主張によれば、そうした社会の事情によって、彼自身の楽しみや幸福が妨げられ、彼の生が制限されてはならない。

もう一つ、ヴェルターが批判しているのは、教養（Bildung）のあり方だ。ヴェルターの生きた18世紀後半は市民階級が台頭し、それに伴い教養市民層と呼ばれる新しい階層が生まれ始めたころである。[9)]

ヴェルターは、第一部５月26日付の手紙の中で、自然と芸術について次のように言及する。

> 自然だけが無限に豊かであり、自然だけが偉大な芸術家を形成する。規則の長所について多くを語ることができるのとほぼ同じように、市民社会を賛美することについても語ることができる。規則に従って自らを形作った人間は、決して趣味の悪いものや俗悪なものを生み出しはしないだろう。ちょうど、法律や礼儀に従って人格を形成した者が、耐えがたい隣人や胡散臭い悪人になることがないのと同じようにね。だが、それに反して規則というものは全て、誰が何と言おうとも、自然の真の感情や自然の真の表出を破壊するのだ。（29）

自然を拠り所とするヴェルターの考察は、ヴェルターの生き方全般に及ぶ。ヴェルターが嫌悪しているのは、教養そのものではない。形成する（bilden）過程で規則に従うことが、自然に反すると主張しているのである。そのようにして自らを形成した人物の代表がアルベルトであった。

これに基づき、本論では、自然の対義語を、市民社会の概念も含めた、当時の規則や価値観を規定している社会とし、登場人物を自然と社会の二つに分類する。ここで、「自然側に属する」とは、内なる自然の真の感情、真の表出が可能な、規則や制限に囚われない人物のことであり、「社会に属する」とは、身分や結婚に関する制度など、当時の市民社会に

おける、あらゆる規則や価値観に左右される人物を指す。

### (2) 自然側に属する人々

**・子供たち**

『若きヴェルターの悩み』には、子供に関する描写が少なくない。ロッテの弟妹や菩提樹の傍らで生活する農家のおかみさんの息子たちなど、登場する子供の数も多く、ヴェルター自身、子供によくなつかれる青年として描かれている。実際にヴェルターは、自分にとって子供が最も近い存在であると考える。

> この世で僕の心に一番近いのは子供だ。子供たちを見ていると、その小さな彼らの中にいずれ必要になるあらゆる徳や力の萌芽が見えるんだ。わがままの中には将来の不撓不屈の性格が、いたずら気の中には世の危険を潜り抜ける良い気質（Humor）や軽快さを具えた性格がね。それが全て汚れないままであるのを見ると、そう、いつだって繰り返さずにいられないのは、人類の師のあの金言だ。「汝ら、もしこれらの者のひとりのごとくならずば。」[10]（61）

子供に対するこのような手放しの賛辞は、ヴェルターが明るく美しい自然を前にしたときに近い。ヴェルターが関心を持っているのは、とりわけ、村からやってくる子供たちの「激しい感情や、欲求を無邪気に爆発させること」（33）である。これは、「自然の真の感情や自然の真の表出」について記した手紙の翌日に書かれた内容だ。つまり、子供たちは「自然の表出」を妨げない性質を有しており、ヴェルターの基本姿勢に合致する。それ故、ヴェルターは子供を人間の理想のありようとし、自分と子供の心の類似を認めたのだ。

子供の行動が自然に適っているとヴェルターが主張するのは、第二部後半にもある。「目の前で愛すべき人が何かと親しい振る舞いをするのを見、それでも手を伸ばしてはいけないことがどういうことか、神は知っている」（177）と述べ、その後でこう続ける。

> だが、手を伸ばすのは、人間の<u>最も自然な</u>（natürlichste）衝動だ。子供は心に浮かぶものなら何でも手を伸ばさないだろうか。そして僕は？（177；下線部論者）

これらの主張からは、人間は子供を「模範」とすべきであり、子供のように振舞うことは、決して悪いことではないということになる。これは、ヴェルターの一種の自己弁護とも受け取れよう。ヴェルターは何度も自分と子供とを重ねた言及を繰り返す。[11] ヴェルターは自分と子供の行動とが類似していることを認識し、その危うさを予感しながらも、子供を人間の理想のありようとし、子供のような行動を「自然な」振る舞いと解釈することで、自らの行動を正当化しようとしているのである。

登場する子供たちにも、ヴェルターは自らの内なる自然を知覚する。特にそれは、菩提樹の傍らで生活する農家のおかみさんの息子において顕著であった。ヴェルターが、「これ

からは自然のみに拠って」絵を描こうと決心したのは、二人の息子、フィリップとハンスの様子が気に入って画に描いたことがきっかけだった。これは、ロッテと出会う前の出来事であり、ヴェルターの内なる自然が穏やかだった頃のことである。彼の心は芸術に向かっていた。しかし、宮廷を辞し、公爵の許を去った後、再びヴァールハイムを訪れたとき、下の息子ハンスは亡くなっている。ヴァールハイムは、「悲しい思い出の地」（159）となってしまう。ヴェルターはこの手紙の冒頭に「このようにうまくいかないのは僕だけではない。全ての人間は当てが外れ、失望する」（159）と記し、この家族の不幸を、自分を含めた人間全ての不幸と看做す。

二人の子供たちは、元々絵を描く際の対象だった。ヴェルターは対象を観察し、描写していたはずだが、いつしか対象は対象でなくなり、ヴェルターの内なる自然と一つになっているのである。

**・若い農夫**

5月30日付の手紙は、以下のように始まる。

> 先日、絵画について書いたことは、確かに文学にも当てはまる。卓越したものを認識し、それを思い切って表現すればいいだけだ。無論、言葉は少ないが、これは多くの意味を含んでいる。僕は今日、ある光景に居合わせた。純粋に書き写せば、世界で最も美しい牧歌だ。しかし、詩や光景や牧歌が何だというのだ。自然現象に共感した場合、いつも技巧を凝らす必要があるというのか。（33）

この後、手紙には若い農夫との出会いについて書かれている。ヴェルターは農夫と出会い、彼と話をしたことが契機となり、先に引用した絵画についての考察を、今度は文学に当てはめて再考した。つまり、農夫という他者を前にして、ヴェルターは明るく美しい外なる自然を前にしたときと同じ感覚を抱いたのである。彼は、そのときの感動を絵画ではなく文章で伝えようとしているが、ここでも表現することに難儀している。

> 彼（農夫）の身振りのニュアンスや、声の調和、眼差しの密かな炎を生き生きと表しうるには、大詩人の才能を持たなければならないだろう。いや、彼の全存在と表情全体の中にあった優しさは、どんな言葉でも言い表すことができない。僕が再現できたとしてもそれはみな、ぎこちないものにすぎない。（35）

ヴェルターは、農夫の中で密かに燃え上がる恋の炎を自らの内面で知覚することによって、相手に共感する。他者の内なる自然と自らの内なる自然の一体を求める素地ができた直後、ヴェルターはロッテと出会う。異性である他者にこれと同じ感覚を見出し、ヴェルターはロッテに恋をする。つまり、若い農夫との出会いが、ヴェルターを恋愛に向かわせるきっかけを作ったのだ。

この農夫は、第二部の９月４日の手紙で再登場する。「自然が秋へ傾くように、僕の内面も、僕の周囲も秋になる」（161）中で、ヴェルターは農夫と出会う。この頃、農夫の境遇は大きく変化していた。徐々に寡婦と親しくなったため、ある日とうとう寡婦の部屋に忍び入ったところ、寡婦の弟に見つかり、追い出されてしまう。ヴェルターは自分にもあり得る話だと考え、農夫に同情して、こう記す。

> 僕が君に語っていることは、誇張もなければ贔屓目もない。それどころか、こう言ってもいいだろうか。ありきたりの僕らの道徳的な言葉で語ったものだから、物語は表現として非常に弱く、僕はこれをだめにしてしまった。
>
> この愛情、この信頼、この情熱は、それゆえ、詩的な捏造ではない。それは生きている。僕らが無教養だとか粗野だとか呼んでいる階級の人間たちの中に、極めて純粋にある。僕ら教養ある人間とは、教養に歪められた人間にすぎない。（165）

ここでヴェルターは再び、表現の問題と規則の問題を取り上げる。「僕ら」とは、教養階級の人間を指す。ここで自然を発露させる農夫を教養ある人間に対峙させ、「自然」対「社会」の対立構図が明確に打ち出されている。このときヴェルターは、農夫に共感し同情しながらも、自分を教養階級の側、つまり「社会」側に属する人間として捉えている。ヴェルターは、自分の所属する教養階級の人間を、「教養に歪められた人間（Verbildeten）」と非難し、そうした人間が使う言葉で自然を表すことに難儀するが、それでも農夫を対象化し、表現することを試みた。そして、書くことによって、ヴェルターの心は「穏やか」（165）になる。

秋の段階では、ヴェルターはまだ、農夫を対象と見ることができた。しかし、農夫の中に潜む自然の破壊力が噴出する12月、ヴェルターの心もまた、自然の破壊力に蝕まれている。そうするともう、ヴェルターの内なる自然は対象と一つになり、その区別がつかなくなってしまう。ヴェルターはもはや表現する力を完全に失い、農夫が犯した殺人事件の内容は編者の手に委ねられ、読者に伝えられる。ヴェルターが書き残したものは、一片のメモだった。「お前を救うことはできない。不幸な男よ。よく分かった。<u>僕ら</u>は救われないのだ」（207；下線部論者）。９月の頃、ヴェルターが「僕ら」という一人称複数に込めたのは、教養市民階級に属する人間たちだった。ところが、ここでヴェルターが「僕ら」と呼ぶのは、農夫とヴェルターのことである。破壊力を内に秘めていた農夫という自然が、限界を超えて表出した様を目の当たりにし、ヴェルターは、彼と自らの運命を重ねて見ているのだ。

**・狂人ハインリヒ**

狂人のハインリヒが登場するのは、第二部の後半である。ヴェルターが宮廷を退官した後、再びロッテへの思慕に悩む日々を送っている頃だ。

「お前が幸福だったとき！」と、僕は町へ急ぎながら叫んだ。「そのとき、お前は水の中の魚のように幸せだったのだね。」天の神よ、あなたは人間の運命としてこのようにお定めになったのですね。人間は、悟性を持つ以前か、悟性を再び失ったときでなければ、幸福ではないと。（189）

内なる自然がそのまま発露する子供や狂人のみが幸福である、とヴェルターは考える。但し、ヴェルターの目指す「自然の真の表出」は、破壊力を有する自然の表出も含んでいる。悟性を失えば、こうした自然には対処できない。この認識がアルベルトと自殺について議論したときからヴェルターにはあり、「情熱が荒れ狂い、人間性の限界がその人に押し寄せた場合、少しの悟性を持っていたとしても、その人に、それがどれだけ役に立つと言うのか」（103）と断ずる。このことを知りながら、ヴェルターは対処する術を持たない。それどころか、彼は対処しようと身構えることもなく、荒れ狂う自然に身を任せる。

芸術も恋も人間形成も規則に囚われず、自然の表出に拠ろうとするヴェルターは、この狂人の中に自らの内なる自然を見ていたのだろう。ヴェルターは、「人間に残された神への信頼までも奪われてしまう前に、神の許へ召されたい」（191）と、神に思いを馳せる。破壊力を有する自然に対抗しようと足掻くわけでもなく、地上における幸福の追求を半ば断念したように、彼は神に問う。「天の父〔神〕の許へ帰ってきた息子を追い出すのか」（191）と。そしてヴェルターは天上の幸福への憧れを募らせてゆく。

**・ロッテ**

ロッテは、ヴェルターが彼女を通して自らの内面を知覚する対象であるばかりでなく、ヴェルターの内面に影響を与える存在、内なる自然の移ろう原因でもある。ヴェルターは、美しい自然の中に身を置き、感性に満ち溢れていた頃、表現することに憧れを抱いていた。しかし、表現しようとする対象を捉えることに難儀する彼には、「表現や生き生きした力」(25) の中に、求める何かを見出すことはできない。ヴェルターの溢れる感性はエネルギーとなり、内なる自然を発露させる何かに憧れる。そして、その力は芸術ではなく恋愛に向けられた。

ロッテは子供たちに囲まれながら、初めてヴェルターの前に姿を現す。

玄関の広間で、二歳から十一歳までの子どもが六人、一人の娘を賑やかに取り囲んでいた。娘の姿は美しく、背は中くらいで、腕と胸のところをピンク色のリボンで飾った簡素な白いドレスを身につけていた。彼女は黒パンを手にし、それぞれの年齢と食欲に応じて子供たちにパンを切り分け、実に優しい様子で一人一人に渡していた。（41）

子供を自然に近い理想のありようと賛美するヴェルターは、彼らの中央で優しく振舞うロッテの様子を、「これまで見たこともないような心惹かれる光景」（41）と書く。子供に

愛され、慕われている存在として印象づけられることによって、ロッテは最初の登場から「自然側」に属する人間としての資格が与えられている。

ヴェルターは、ロッテについて「極めて開けっぴろげに、純粋に楽しんでいるという真の表出を湛えた（voll vom wahrsten Ausdruck）彼女の目」（49）と記している。「真の表出」とは、ヴェルターが、自然と芸術について考察した際に使用した語と同じだ。つまり、ロッテは「自然の真の感情や自然の真の表出」das wahre Gefühl von Natur und den wahren Ausdruck に従って生きている「自然側」の人間であることが、ここでも印象づけられている。しかも、ロッテについての記述には wahrsten という最上級が使われており、より一層強調されているのだ。

婚約時代のロッテは、ダンスを好む娘として、明るく快活に描かれている。ところが、ロッテがアルベルトと結婚した第二部では、ロッテの動きは静かになる。

第二部の前半部分、９月12日付の手紙は、初稿の『ヴェルター』にはなく、第二稿で新たに付け加えられた。[12] ロッテが小鳥に餌をやる場面である。ロッテは小鳥がキスをすると言い、まず自分でキスをしてから、次にヴェルターにもキスをさせる。

> 私の口からも餌を食べるのよ、とロッテは言った。彼女は唇にパン屑をくわえて小鳥方へ差し出した。その唇からは、無邪気に分かち合う愛の喜びが、この上ない幸福に包まれながら微笑みかけていた。（167）

ヴェルターは、これを見て顔をそむけ、「ロッテは、天上の無垢で至福な光景で、自分の想像力を刺激するべきではなかった！　時おり、生の無関心が寝かしつけていた眠りから、僕の心を呼び覚ますべきではなかった！」（167f.）と考える。ここでは、ヴェルターに対するロッテの愛情が強調されていると共に、ロッテの内なる自然の危険性も暗示されている。このときのロッテの動きは、くるくると回っていたダンスと比べて静かだが、しかしロッテの内なる自然は、婚約時代の動きのある明るい自然と違って、ヴェルターの心を覚醒させる力を秘めた自然である。それは自然の表出である分、制御できず、それだけに一層危険を伴う。

第二部の後半、11月24日付と12月４日付の手紙の中で、ロッテはピアノを弾いている。ヴェルターはもう、「ロッテの愛らしい美しさも、素晴らしい精神の輝き」（183）も見ない。彼が見るのは、ロッテの眼差しに込められた「内奥の共感と、この上なく優しい同情」（183f.）だった。ロッテの動きは静かで、ヴェルターの心だけが激しく乱される。

ダンスからピアノ演奏へと変化するロッテの動きは、婚約者から妻という立場に変化した外面的な事情による。ここには、落ち着いた生を求める、ロッテの「社会」的な側面が現れている。しかしながら、ロッテの内なる自然は、相変わらずヴェルターの内なる自然と共鳴している。ヴェルターの情熱を諌めながらも、内奥の共感の込められた眼差しをヴェルターに向けるのは、そのためだ。

ヴェルターの内なる自然は、ロッテの内なる自然との一体化を求めようとする。第一部

で、ヴェルターが外なる自然を明るく美しいものとして賛美していた頃、彼はロッテという対象を捉えることができず、肖像を描くことを試みても、結局、三度失敗したため、ヴェルターは影絵で満足することにした。[13] 第二部では、対象との一体化はますます顕著になる。ヴェルターは、ロッテの発した「さようなら、私のヴェルター」（183）という言葉を、就寝前の自分に、「おやすみ、私のヴェルター」（183）と、つい独りで言ってしまう。
自らの内なる自然が、他者のそれと一つになっているかのような感覚を異性に見出すこと、それがヴェルターの考える愛だ。ロッテの中にも、これと同じような感覚がある。「クロップシュトック」という一語を発することによって、ヴェルターと同じ世界を分かち合おうとしたところに、それは現れている。「編者より読者へ」の中で、ロッテの心情は次のように報告される。「知り合った最初の瞬間から、二人の心情の一致は非常に美しく、明白であり、長く続いた彼との付き合い、共に経験した数々の状況は、彼女の心に消し去ることのできない印象を残していた」（229）。[14]

パートナーがアルベルトであるというのは、「社会」における一つの制約にすぎない。ロッテは、身近な世界、家庭生活に、楽園に近いものを感じていた。[15] 弟妹たちの母親役もこなしながら、妻としての役割も果たす。家庭を大切にするロッテの「社会」的な側面は、アルベルトを必要としている。しかし、彼女の「自然」的な側面が必要としているのは、ヴェルターだ。彼となら読書を通して感情を共有できたし、「自分が感じたり考えたりした興味のあることは、全て彼〔ヴェルター〕と分かち合う」（229）こともできた。ヴェルターの意見に従えば、「規則というものは全て、誰が何と言おうとも、自然の真の感情や自然の真の表出を破壊する」。ここに、ロッテの抱える矛盾があり、彼女の内部に潜んでいた破壊力を有する自然が動き出す。その力は、小鳥にパン屑を与える行為により、徐々に培われていった。そして、ロッテの破壊的な自然は、ヴェルターの使いの少年にピストルを渡すところで表出するのである。

### （3）　社会側に属する人々

**・貴族たち**

ヴェルターはロッテから離れ、公使のもとで働き、そこで目にした貴族たちの数々の愚行――例えば、食事の席で上座を争うなど――に、辟易する。特に、公使とは折合いが悪い。公使は、ヴェルターの書く文章に難癖を付け、これがヴェルターを不快にする。

> 「そして」が無かったり、接続詞が無かったりするとだめなんだ。度々僕が思わず書いてしまう倒置法は、特に目の敵さ。複雑な複合文は、昔ながらの節回しにしてやらないと、全く内容を理解しないんだ。（127f.）

公使はヴェルターの書く文章を認めないし、また理解もしない。ヴェルターは、倒置法を含むような自分の文章[16] が役所の文書には適さないことに気がついておらず、官僚主義を受け入れて、これに合わせることをしない。「自然の真の感情や自然の真の表出」が妨げら

れたと感じたとき、ヴェルターの内なる自然が反発する。

宮廷に退職を願い出たヴェルターは、彼との交際に興味を抱いている公爵と共に過ごそうと考えるが、この公爵にも失望させられる。

> 公爵は悟性の人だ。しかも、全く平凡な悟性の人だ。〔中略〕ここでやった一番のことといえば、絵を描いたことだ。公爵は、芸術を解するし、もし、むかむかするような衒学的なことや陳腐な術語で視野を狭めなければ、もっとよく解するだろう。時々僕は歯軋りしているよ。自然や芸術に対する豊かな想像力で彼をあちこち案内しているというのに、突然、公爵が型にはまった人工語でうまく言えなくて、まさによく表現したつもりになっているときなんかにね。(155 f.)

公爵をはじめ、貴族社会でヴェルターが遭遇した人々や出来事は、「悟性」や「型にはまった」ものに囚われている「社会」そのものだった。しかし、こうした自然の対極にある人物たちにヴェルターが呑み込まれることはない。ヴェルターは彼らを対象化し、彼らと接しながら絵を描くこともできる。「悟性」の人間、すなわち「社会に属する」人間は、ヴェルターにとって反発する対象にすぎない。

**・アルベルト**

アルベルトは、ヴェルターと対照的な人物として描かれている。地位もあり、周囲の人々からの信頼も厚いアルベルトに対して、ヴェルターも努めて好感を抱こうとする。しかし、ロッテの夫であることに対する嫉妬も加わり、彼の性質に対する反発は徐々に高まってゆく。

二人の意見は、自殺に関する議論で真っ向から対立する。ヴェルターは、アルベルトを自分と対峙する人間と見なし、「君たち」という二人称複数を用いることで、彼を含めた複数の人間を非難している。ヴェルターの批判対象は、人間の内なる自然に目を向けない「理性ある人々」、「道徳的な人々」(95)、「悟性の人間」(103)、つまるところ、「社会側」に属する人々である。人間が精神異常に陥る状態や、情熱を抱くことについて擁護するヴェルターの言葉は、自殺することに理解を示そうとしないアルベルトには、まるで通じない。

> 人間の本性(Natur)には、限界があるんだ、と僕は続けた。それは、喜びや苦しみ、痛みをある段階までは我慢することができる。そして、それは限度を超えるや否や、滅びる。ここでは、人が強いか弱いかの問題ではなく、その人の持つ苦しみの限度に持ちこたえられるかどうかが問題なんだ。(99)

ヴェルターが語ろうとしているのは、人間の本性、つまり内なる自然に関することだ。それなのにアルベルトは、時代における「社会」の価値観で理解し、「つまらない決り文句」(97)で返答するばかりである。ヴェルターもまた、自分とは同類でない他者の主張は、

真っ向から否定し、受け入れることができない。アルベルトの内に、自分の内にあるものと共鳴するものを見出すことができないのである。そのため、彼らは互いに自分の考えを相手に伝えることができず、結局は理解し合わないまま分かれてしまう。

## ３．存続する自然

### （1）　ヴェルターの死

ヴェルターの自然を捉える際の特質は、彼の捉える現世と来世の観念とも結びつく。ヴェルターは現世を夢のように捉え、そこで生きることを「囚われの身で壁に絵を描く」（23）という比喩で表現している。活動や探求をすれば何らかの制限があり、生の目的は不明確である。こうした世界で生きて活動することに、彼は疑問を抱く。そのため、ヴェルターは自己の内部に戻り、一つの世界を見出す。その世界は、「表現や生き生きとした力の中というよりも、予感と暗い欲望の中」（23f.）にあり、「僕の五感の前で全てのものが漂っている」（25）。ヴェルターはこの世界に、「夢想を抱きながら微笑みかける」（25）。

生をこのように捉えるヴェルターは、宮廷社会で器用に振舞うことができない。彼は、宮廷の自分を、覗きからくりの中で動き回る小さな人間たちの一人のように感じ、自分も周りの人間たちも皆、操り人形のように思う。

活動に制限のある人間の生を夢と捉え、社会的な活動の場における自分やその他の人間を、操り人形のように感じるヴェルターの内なる自然は、規則や制限のある「社会」の中で自らを適切に表出できない。ヴェルターが生を全うできる場、それは、規則に制限されることのない場、ヴェルターの内なる自然が真に表出できる場でなければならない。

ヴェルターは、周囲の美しい自然を形容する際、度々「楽園」Pradies や「楽園のような」paradiesisch という単語を使用する。美しい自然に身を置き、自らが自然の一部として溶け込んでいるかのように感じられるとき、彼にとってそこは楽園となり、自らを偉大な画家と称するのだ。

ヴェルターが「楽園」と感じた美しく明るい自然は、やがて破壊力を有する暗い自然に変容する。外なる自然を前にして彼が見ていたのは、彼自身の内なる自然だった。内なる自然を外なる自然に見てしまうヴェルターは、破壊的な自然とも一体化せざるを得ない。これが、地上で彼に科せられた苦難（Leiden）であろう。ヴェルターは、そのような自然に対抗することなく、これに呑み込まれる。このとき、「楽園」はヴェルターの前から姿を消し、かつて目にしていた明るい自然が、楽園として記憶されるのだ。

ヴェルターは、現世において生を全うできる場としての楽園を、外なる自然に見出そうとした。それは、ヴァールハイムやその近辺に確かに存在したかに思われた。しかし、内なる自然の変化と共に、楽園は過去のものとなってしまう。記憶の中にしか存在しなくなった楽園を、もはや探求することはできない。そのとき、ヴェルターの運命は、予告どおり死へと向かう。

ロッテに宛てた最後の手紙の中で、ヴェルターは、死について考えを巡らす。彼の心に

は、「死ぬ」や「消え去る」という言葉は、感情を伴わない空虚な響きでしかない。ヴェルターは、「死ぬ」ことによって「消え去る」という考えを否定する。ヴェルターにとって死は終わりではない。手紙の後半には、「僕らは存在するでしょう！（Wir werden seyn!）再び会うでしょう！」（251）と記されている。第一部の最後に置かれた９月10日付の手紙の中で、ロッテもまた、「私たちは存在するでしょう！」Wir werden seyn!（119）と同じ言葉を発している。これに続けて、死んだ後も再び会えるのかと尋ねたロッテに対し、ヴェルターは答える。「会えますとも！ この世でもあの世でも、会えますとも！」（119） あの世は、ヴェルターにとって永遠の世界だ。社会に縛られる規則もなく、魂と魂の触れ合いを可能にするであろう楽園という理想は、そこにこそあった。

### （2） 存続する自然

ヴェルターを破滅へと向かわせたものは、外なる自然や他者を経由して、内なる自然を知覚する、彼の内面の特殊性だった。それが芸術においては、神、自然、自らの魂（心）、絵画（芸術）という四位一体の連関を、他者においては魂と魂の触れ合いを求める結果となった。これらは、地上では実現し得ない理想である。

ヴェルターは、当初絵画でこの理想を追求しようとしていた。しかし、理想を探求する力は一旦芸術へ向けられたが、やがてロッテと出会うことにより他者に対してより強く向けられるようになった。ヴェルターは、外なる自然を前にして感じた芸術の理想を、他者との関係においてこそ求めようとしたのである。現実世界でこれは実現しないため、追求すれば苦難が強いられ、やがて破滅へと向かう。ヴェルターの内なる自然には限界があるが、外なる自然に限界はない。彼の内なる自然が限界に達したとき、限界のない自然は彼を呑み込む。これが彼の運命を決定する、動かし難いデモーニッシュな力であり、この力もまた、自然の一種である。

神、自然、自らの魂（心）、絵画（芸術）という四位一体の連関において、絵画を文学に置き換えると、それはゲーテの目指す文学の理想となり、広い意味でこの連関自体がゲーテの考える自然でもある。現実世界においては、このような四位一体の連関を実現するのは不可能だ。だからこそ、ヴェルターという自然は、作品の中では破滅した。現実世界においては不可能なこの連関は、しかし、芸術作品の中なら希望というかたちで生き続けることができる。ゲーテはこれを、生の希望の内実として文学という芸術作品に託したのである。作品の中にそれは実現可能性として、希望として存在しており、そのようなかたちで後世に残される。四位一体の連関は、芸術作品の中においてのみ、存続させることが可能だった。

## テクスト

『若きヴェルターの悩み』からの引用は、次の版による。Goethe, Johann Wolfgang: Die Leiden des jungen Werthers (Fassung B,1787). In: ders.: Sämtliche Werke. Bd.8. Hrsg. von Waltraud Wiethölter. Frankfurt a.M. 1994. 引用の際は、引用文末尾の括弧内に頁数のみを記す。

『若きヴェルターの悩み』を訳出する際は、以下の既訳を参考にした。

高橋義孝訳『若きウェルテルの悩み』、新潮社、1951年。
竹山道雄訳『若きウェルテルの悩み』、岩波書店、1951年。
内垣啓一訳『若きウェルテルの悩み』（『世界の文学５』所収）、中央公論社、1969年。
柴田翔訳『若きヴェルテルの悩み』（『世界文学全集７』所収）、集英社、1976年。

## 注

1）書簡体形式の中でも『ヴェルター』が特徴的なのは、全てがヴェルター自身による手紙だけで構成され、文面からヴィルヘルムやロッテからの返信が窺えるにも拘らず、ヴェルター以外の手紙が一切省かれていることだ。この点で、リチャードソンやルソーに代表されるそれまでの書簡体小説と異なる。

2）ヴェルターは、男の子と赤ん坊を写生しながら、「これからは、自然のみに拠ろう」（29）と決心し、次のように考える。「自然だけが無限に豊かであり、自然だけが偉大な芸術家を形成する。〔中略〕それに反して規則というものは全て、誰が何と言おうとも、自然の真の感情や自然の真の表出を破壊するのだ。」（29） これらの自然（Natur）という語はどれも、内なる自然と外なる自然の意味を含む。本論第二章（１）参照。

3）神について「僕らを自分の姿に似せてお作りになった全能」（15）と表現し、人間の魂を「神の鏡」と考えるのは、敬虔主義思想やライプニッツのモナド論の影響による。

4）Vgl. Goethe, Johann Wolfgang: Die schönen Künste in ihrem Ursprung, ihrer wahren Natur und besten Anwendung, betrachtet von J. G. Sulzer. 1772. 8. 85 S. In: ders.: Sämtliche Werke. Bd.18. Hrsg. von Friedmar Apel, Frankfurt a.M. 1998, S.99.

5）『若きヴェルターの悩み』は、第一部、第二部、「編者より読者へ」の三部で構成されている。

6）神の現前を感じたときヴェルターは思う。「そうすると、しばしば憧れは募り、思うのだ。ああ、これを再現できたらと」（15）

7）自殺についてアルベルトと議論をした際、ヴェルターは自殺した娘の話をする。男に捨てられた娘の様子を、ヴェルターは「深淵を前にして立つ」（101）と表現

している。

8）本論第二章（3）アルベルトの項参照。

9）教養市民層という語は後に作られたことばであり、その内容も時代によって曖昧だが、18世紀後半は、大使、将校、学者、芸術家などを概ね指していた。野田宣雄著『ドイツ教養市民層の歴史』（講談社、1997年）。

10）マタイ伝18章3節参照。この後「天国に入らずを得じ」と続く。

11）例えば、自分の心を「病気の子供のように扱ってもいる。つまり、何でも言うことを聞いてやるんだ」（17）や、「なんと子供なんだろう。一つの眼差しを求めてやまないとは。なんと子供なんだ。（中略）ああ、僕はなんと子供なんだ」（73）など、自分の心が子供と近い関係にあることを意識している。さらに、「僕は自分の状態について常にはっきりと分かっていながら、それなのに、いかに子供のように振舞ってきたか、今もはっきりと分かっている。なのに、改善の兆しはないのだ」（89）とも述べている。

12）初稿（1774）と第二稿（1787）との、作品の内実に関る大きな違いは、若い農夫のエピソードが加えられたこと、ヴェルターに対するロッテの好意が明確に示されていることであろう。小鳥にキスをする仕草も、ロッテの好意を示す一つである。本論の主張する、他者に対して魂の触れ合いを求めようとするヴェルターの特性は、これらの付加された内容からも強調される結果となった。

13）第一部、7月24日付の手紙（83）参照。

14）「心情の一致」die Übereinstimmung ihrer Gemüther という語は、初稿にはない。

15）本論 Exkurs に述べたとおりである。

16）倒置法はヴェルターが好んで用いる文章様式で、シュトルム・ウント・ドラング期に、強調表現として広まった。

# Die Erscheinung der inneren Natur

## ――in Goethes *Die Leiden des jungen Werthers*――

Ayako KIDA

Die Struktur von Goethes Briefroman *Die Leiden des jungen Werthers*, die nur die Briefe der Hauptfigur präsentiert, erlaubt es, Werthes Innenwelt darzustellen. Diese ist nicht nur direkt in seiner Selbstreflexion wiedergegeben, sondern auch in der Widerspiegelung des Anderen. Werthers Innenwelt erscheint nämlich in der Landschaft der Umgebung, in seinen Ansichten und seinem Urteil gegenüber den Ereignissen in Bezug auf ihn selbst.

Werthers Naturbegriff schließt im Allgemeinen zwei Bedeutungen ein: die äußere Natur, nämlich alle Dinge der Welt, z.B. die Landschaft, das Wetter, die Pflanzen und Tiere usw. und die innere Natur des Menschen, z.B. die Wesensart, den Charakter und das Temperament einer Person. Werther unterscheidet die zwei Bedeutungen nicht, für den/die LeserIn gibt es in dem Wort „Natur“ aber zwei Bedeutungsebenen. Die Besonderheit in Goethes Roman ist, dass beide Naturen hier zusammenhängen. Zuerst auf einer konnotativen Ebene, das heißt, dass sich die äußere und innere Welt analog darstellen lassen. In der Relation die sich zwischen beiden Naturen aufbaut, hat Goethe eine Ausdrucksmöglichkeit für Werthers Innenwelt gefunden. Darüber hinaus kommt Werthers innere Natur auch in seiner Beziehung zu anderen Figuren des Romans zum Ausdruck. Figuren von gleicher Art werden von ihm hoch geschätzt. Dagegen stößt sich seine innere Natur ab von denen, die ihm nicht ähnlich sind.

Was Werther zugrunde gehen macht, ist diese nach außen gekehrte Innenwelt, dass er nämlich seine innere Natur über die äußere Natur oder die Personen um ihn stellt. Diese erhebt sich als sein Ideal auch über die Kunst, das heißt, die Viereinigkeit von Gott, die Natur, seine Seele (sein Herz) und die Zeichnung (die Kunst), und sogar über die Personen, die die Berührung mit seiner Seele begehren. Ideale können auf der Welt nie verwirklicht werden. Diese Viereinigkeit, auf die Literatur umgemünzt, ist Goethes Ideal von der Literatur, und die Beziehung zwischen ihren Bestandteilen selbst nach seiner Ansicht in weiterem Sinne auch als Natur zu bezeichnen.

Eine irdische Welt steht der Verwirklichung dieser Beziehung entgegen. Eben darum ging die Natur Werthers und er mit ihr im Text zugrunde. Im Kunstwerk kann aber eine auf der irdischen Welt unmögliche Beziehung als Hoffnung verwirklicht werden. Goethe vertraute sie dem Kunstwerk Literatur an, als die Wahrheit von der Hoffnung des Lebens. Sie existiert in seinem Werk als Möglichkeit, als Hoffnung und bleibt in solcher Gestalt für die Nachwelt erhalten.